

# 長崎唐通事何礼之の英語習得

許 海 華

## Mastering English by Ga Noriyuki 何礼之 , the Chinese Translator at Nagasaki

XU Haihua

While Japan at the end of the Edo period revised their national seclusion system and started to set forward with internationally opening policy, it was the training of translators to communicate at practical negotiations with foreign countries that was most urgently required. In the case of *Tō tsūji* 唐通事, Chinese translators at Nagasaki during the Edo period, some of the youths transferred themselves to be in charge of two languages, from solo translation for Chinese to translation for both Chinese and English. They later became very active in the frontlines for diplomacy, education and translation because of their English abilities during the periods from the end of the Edo to Meiji era. One of the typical examples was Ga Noriyuki.

Ga Noriyuki was the person who flourished as a liege of Tokugawa Shogunate, a bureaucrat, an educator as well as a translator, who had been working as a Chinese translator at Nagasaki. It was his mastering English which brought him a great turning point for his life. This paper examines historical backgrounds and progress for Ga Noriyuki's mastering English from the view point of the alteration of *Tō tsūji* at Nagasaki during the periods from the end of the Edo to Meiji era, through full survey on articles on his careers.

Key Words;

The End of Edo period, *Tō tsūji* (唐通事), Ga Noriyuki, Career, Mastering English

## 一、はじめに

幕末の日本ではこれまでのいわゆる鎖国体制を改めて対外開放政策をすすめるが、その際にもっとも急がれたのは外国との交渉の際に言葉を交わす通訳であった。江戸時代の長崎では従来オランダ語は蘭通詞、中国語は唐通事という担当体制であったが、幕末では英語、フランス語、満洲語の研修が通訳者の新しい課題となった。唐通事の場合、若い世代の数人が中国語から英語の兼修に転じ、後に英語を以て幕末明治期の外交・教育・翻訳において大いに活躍した。その内の一人何礼之がその典型的な例としてあげることができる。

何礼之は、長崎唐通事の出身で、幕末から明治時代にかけて幕臣、官僚、教育者、翻訳者として活躍した人物である。長崎、江戸、大阪で英語教育を積極的に行い、幕末明治期日本の英学普及へ多大な貢献をあげ、教育、翻訳の分野において熱意と努力を注いだのである。また、彼は旧唐通事の変容という視点から見ても典型的な意義を持っている。

ところが、外交、教育、翻訳の各分野に貢献をなしていたにもかかわらず、これまで何礼之に関して外交史、学術史的側面から十分な検討は行われず、彼個人の経歴や旧唐通事個人の動向、通事集団の変容などの視点からも研究が欠如している。

日本の英学史、洋学史を考える際に、唐通事であった何礼之の英語習得は避けては通れない。これまで何礼之を含む幕末長崎唐通事の英語学習に関しては、古賀十二郎「米人 Dr.D.J.Macgowan の渡来 附唐通事の英語研究」<sup>1)</sup>と大久保利謙「幕末英学史における何礼之—とくに何礼之塾と鹿児島英学の交流—」<sup>2)</sup>の二つの先行研究が挙げられる。前者は何礼之を含む長崎唐通事たちが長崎来航のアメリカ船に赴いて、二週間ほど D.J.Macgowan に英語を教わった史実を明らかにした。幕末唐通事の英語学習を記した史料が極めて乏しいため、古賀の研究も資料としてその後の研究に引用されている。後者は、主に幕末長崎時代の何礼之の英学とその英学塾および鹿児島英学との交流について、何家文書の日記、履歴などの新史料によってその時期の何礼之の活躍を解明した。この論文によって、何礼之を代表とする長崎唐通事による英語学習の貴重な史料が知られるようになったのである。

そこで本稿は、何礼之の履歴を十分に検討し、幕末明治期における長崎唐通事の変容の視角から、彼の人生に大いに影響を与えた英語習得の歴史的背景、経緯について考察したい。

1) 『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、九州書房、1947年、73-78頁。

2) 1977年『鹿児島県立短期大学地域研究所年報 第六報』に発表。大久保利謙歴史著作集5『幕末維新の洋学』、吉川弘文館、1986年、344・367頁。

## 二、何礼之の家系と略歴

### 1. 何礼之の家系

何礼之は「が のりゆき」または「が れいし」と呼ばれる。先名は何礼之助、天保11（1840）年7月13日に長崎西上町に生まれた<sup>3)</sup>。長崎唐通事の家系何家の第八代である。宮田安の調査により何家系譜要覧から何家の先祖は本籍が中国浙江省温州府永嘉県であって、明末に東渡して来日したとされる。二代目以降、海庵系何家は屢々養子を迎え、何礼之の父小通事末席何栄三郎（先名は三良太・栄八郎、晩年は静谷）も養子として第六代を嗣いだ。<sup>4)</sup>ただ、栄三郎は長崎御出入医師榊林栄哲の季子であるが、生母「以瀬」は何家第五代吉郎右衛門（寂庵公）の長女であるため、吉郎右衛門の実の孫でもあった。

一方、何礼之の母「種」も長崎唐通事家の出である。種は高材系何家第三代仁右衛門の娘、四代何隣三の妹であるが、栄三郎に嫁し、長男に礼之助、次男に伊代吉の二男を挙げた。江戸時代の長崎唐通事家間では婚姻・養子縁組が多数行われたが、幕末になって両何家の間でもそうであった。礼之助より三歳年下の弟伊代吉は、幼少の頃、生家を出で母の高材系何家の養子になり、何隣三の跡を継いだ。何礼之の自筆の何家系譜要覧に「是において南北両家統合して一系に帰す」とある。<sup>5)</sup>元治元（1864）年に幸五郎と改名し、明治以降は何幸五と改めた。<sup>6)</sup>兄弟二人がそれぞれ唐通事の両何家を継承し、家業の専門技である唐話はもちろん、英語をも修習することによって、幕末明治期に活躍したことは長崎唐通事の歴史において一佳話といえる。

### 2. 何礼之の履歴資料

英語習得が何礼之の人生に如何なる影響を与えたかを解明する前に、まず何礼之の経歴を明らかにする必要がある。これまでの研究は資料紹介に限られ、特にまとまった何礼之の人物伝さえ見当たらない。そこで何礼之の履歴資料を紹介したい。

先行研究から得られる示唆と調査によって、下記のとおり三種四件の履歴資料があげられる。

3) 宮田安『唐通事家系論考』（長崎文献社、1979年）の「何礼之」の条には「天保十一年九月」に出生とある。

4) 栄三郎は何家第六代庄右衛門の唯一人の子実子亀十郎の養子であるが、亀十郎が文政七か八（1824・1825）年に唐通事の名門である陳冲一系頼川家の養子となったので、系譜上に栄三郎が何家第七代とされている。

5) 後に東京麻布で高材系が南坊何家といい、海庵系が北坊何家と言っていたからである。宮田安『唐通事家系論考』、469頁。

6) 何幸五の履歴と実績については、中原英典「何幸五郎略伝——訳本『香港巡邏章程』を中心に」（『警察研究』第四十九巻 第三号、1978年3月）に参照されたい。

### (1) 唐通事「何礼之助」履歴 (『訳司統譜』)

唐通事としての履歴である三ヶ条は「稽古通事」、「小通事末席」、「小通事」の項目の下に記され、「天保十五」(1844)年から文久元(1861)年まで何礼之助が経歴した四つの職掌を記録している。

### (2) 「何礼之履歴」<sup>7)</sup> (『勅奏任官履歴原書』 下巻)

『勅奏任官履歴原書』は元老院に所属した勅奏任官となった合計217名の履歴書資料である。原文書は上・下二巻に分けられ、上巻「転免病死ノ部」は明治23(1890)年の元老院廃止以前に転任、免官、死亡した者の履歴書、下巻は元老院の廃止まで所属していた人の履歴書を編纂したものである。元老院廃止の同年、元老院事務局から内閣に移管された。<sup>8)</sup>

何礼之は明治17(1884)年12月に元老院議官になったため、明治元年(1868)6月<sup>9)</sup>から明治23(1890)年に元老院が廃止されるまでの履歴は『勅奏任官履歴原書』に収められている。その間の任官・叙位・年俸が詳細に記されており、厳密性と信憑性に特に文献価値が高いといえる。

### (3) 何礼之に関する第三種の資料

#### ①何礼之「履歴書」<sup>10)</sup> (『松方正義関係文書』第十二巻)

『松方正義関係文書』<sup>11)</sup>の書類の部に「何礼之事歴」と題した資料がある。何礼之の「履歴書」はその主な部分であるが、前に前田正名が執筆した履歴編纂の由来と編纂に関わる何礼之の門下生であった者の「芳名録」が付されている。

この「履歴書」の内容は誕生から始まって大正5年4月までである。

#### ②何礼之「履歴」(マイクロ資料「何礼之文書」1)

この履歴は「何礼之文書」の冒頭部にある。<sup>12)</sup>何礼之の自筆日記と違って、半紙判大の用紙に

7) 柏書房、1995年、219-224頁。

8) 原文書は国立公文書館所蔵、排架番号：2A 31-9 職149。

9) 本稿では、西暦が採用される明治5年12月までは日付は旧暦であるが、明治6年からは西暦を使用。また、史料引用の場合は原文のままとした。

10) 大東文化大学東洋研究所、1991年、364-373頁。

11) 『松方正義関係文書』は、書簡の部と書類の部に分かれる。書簡は黒田清隆、山県有朋、伊藤博文等の松方宛書簡、松方発信書簡、家族間の書簡、家族と第三者間の書簡、その他第三者間の書簡からなる。書類の部は、文久・元治年間日記7冊を含む松方正義伝記資料や、財政関係の意見書、大津事件関係書類、島津家関係資料などからなる。

12) 「何礼之文書」マイクロ資料は、履歴、日記(それぞれ「公私日録」・「静谷記 出府船中上陸日記」・「日

邦文タイプで打たれたもので、7枚14頁からなる。内容的には『松方正義関係文書』所収の何礼之「履歴書」とほぼ一致しているが、若干の言葉の違いと情報の増減がある。また、末尾に「大正八年六月廿五日抄写」とあるから遅くても何礼之が没する大正12年3月の約前四年に作成されたものである。

以上二点の履歴の整理を通じて、この履歴資料の由来と編纂について知るところが多い。履歴の編纂者については、大久保利謙氏によって「大正八年は何礼之もまだ生存中であるから、これは本人が書いた（または書かせた）ものか」と指摘されたが、「何礼之事歴」に記されたとおり、そもそも何礼之の門下生たちが発起したものである。編纂の目的は、

（前略）爾來先生カ奮然率先シテ天下ノ洋学生ヲ訓育シ、人材ヲ養成スルニ極力尽瘁シ、依テ以テ明治中興ノ偉業ニ貢献セラレタル事蹟ハ、洵ニ顕著ナルモノニシテ、其功績ヤ決して没却スヘカラス。故ニ先生ノ薫陶ヲ享ケタル諸彦ノ存命中ニ先生カ陰ニ陽ニ国家ニ致セシ功績ヲ調査編纂シテ、之ヲ世ニ公表スルハ、此昭代ニ際シテ良挙且必要ノ事ト信ス。…と明記しているが、発起・参与した者は芳川顕正、中嶋永元、前嶋密、奥山政敬、高橋新吉、濱尾新、豊川良平、岡田好樹、嶋田胤則、鮫嶋武之助、高良二、佐藤秀顕、中村孟、廬高朗、吉村寅太郎、野澤鷄一、高原弘造、小川銚吉、瓜生震、榊茂夫、服部邦彦、日下義雄、戸波親信、宮崎道正、明石春作、柳谷謙太郎、松田周次、星野親敦、牟田豊、前田正名、高峰讓吉、計31名である。その内、廬高朗が唐通事君玉系廬家の第九代、柳谷謙太郎が唐通事柳屋家の七代目であって、いずれも唐通事の出身者である。

もう一つは、履歴編纂開始および完成の時期である。前田正名が執筆した編纂由来の末に「大正三年十月廿四日」との日付があり、つまり1914年10月に正式に発足したが、その完成は履歴最後の条に記した「大正5年4月1日」以後になると考えられ、履歴の収集・整理が完成するまで少なくとも1年半以上かかったのである。さらに『松方正義関係文書』版「履歴書」に逐条に記された木杯下賜の履歴およびその寄附事情は、「何礼之文書」版「履歴」においてすべて省略され、かわりに「其他明治十年以来屡屡火災救助、学校寄附恤兵、公共事業へ寄附等ノ廉ヲ以テ木盃ヲ下賜セラルル事十度アリ。今詳記ヲ略ス」と一言で説明している。「大正八年六月

---

録」・「日記」・「日新」・「日乗」・「日誌」・「当用日記」と題する）、『米国教会律例』、『禅宗諸録解稿本 禅語解』、『泰平年表略』、『体源抄』などの蔵書、『奈良紀行』、『見聞書』などからなっており（全部でマイクロフィルム12リール）、現在東京大学社会科学研究所図書室に所蔵。1977年大久保利謙氏「幕末英学史における何礼之一とくに何礼之塾と鹿児島英学の交流―」が発表された時点では何家第十代当主何初彦に保存されていたが、中井えり子氏「『官許佛和辞典』と岡田好樹をめぐって」（『名古屋大学附属図書館研究年報』6、2008年、47-62頁）から、マイクロフィルムで東京大学新聞研究所に所蔵されたことがわかる。新聞研究所の元所長何初彦教授（1982年まで在任）から寄贈されたと考えられる。

廿五日」の抄写は、何礼之の履歴がほぼ完成してからのことであった。ただし、「何礼之文書」に保存されている版本に明治2（1869）年の条に第一人称「余」が二ヶ所あるが、刊行された『松方正義関係文書』版「履歴書」に相応の箇所を「礼之」に改めている。また、例えば「何礼之文書」版の「文久三年」任命情報の後に続く三行の文字は『松方文書』版に見当たらない。それは一度写された履歴に修訂を加えられたからと考えられる。

上記二点の資料の文献価値からいえば、三種の履歴でもっとも整ったものである。マイクロフィルム化された何礼之の日記は明治元（1868）年から明治4（1871）年の部分が欠如しているため、その四年間の経歴を、この二点の履歴に記された情報から窺うしかない。また、明治以前および明治23年以後の部分を以て『勅奏任官履歴原書』収「何礼之の履歴」の不全を補うことができる。

### 3. 何礼之の経歴

つぎに、以上三種四点の履歴記録に依拠して何礼之の生涯を述べたい。

何礼之は弘化元（1844）年12月6日に父跡を継ぎ、僅か五歳で稽古通事になった。『訳司統譜』に記された最初の履歴には「小通事末席何栄三郎倅 何礼之助 当辰十四歳」<sup>13)</sup>とあるが、通事になるには年齢制限があるため、表向きの年齢で登録されたと思われる。安政4（1857）年12月5日に小通事末席に上り、<sup>14)</sup> 安政7（1860）年9月15日に小通事助過人<sup>15)</sup>に、さらに文久元（1861）年11月24日に小通事助に昇進した。<sup>16)</sup> 以上『訳司統譜』の記述からみれば、ただ唐通事の昇進の道に沿って順調に進んでいたようだが、「履歴」によると、安政元（1854）年から英語を修習し始め、安政6年に長崎「税関従事ヲ命」じられることになり、文久2年（1862）にロシア軍艦の對馬一角の占領による一件で長崎奉行の退去交渉に通訳として随行した。文久3（1863）年7月に長崎奉行支配定役に抜擢され幕臣となった。この時から、彼は外交・税関の公務多忙のなかを、英語稽古所の学頭に補され、なお自宅に私塾を設け英語教育を行っていた。慶応3（1867）年、幕府の命により一度上洛してから、7月に幕府の開成所教授職並に任

13) 頼川君平編『訳司統譜』、1897年、八十丁。

14) 同前書、五十四丁。

15) 小通事は寛永17（1640）年には二名、万治元（1658）年に四名、寛文12（1672）年に五名となって定数化した。その後、享保3（1718）年に小通事末席、元文4（1739）年に小通事並、宝暦元（1751）年に小通事助が設けられ、さらに文政12（1829）年小通事の下、小通事助の上に小通事過人が新設された。何礼之が安政7年に昇った「小通事助過人」という職の格は、小通事並と小通事助の間にあると思われる。

16) 『訳司統譜』、三十三丁。



ぜられ、11月に軍艦役主格・海軍伝習生徒取締に就いた。<sup>17)</sup>

慶応3年12月9日（1868年1月3日）に「王政復古の大号令」が発令され、徳川幕府の支配が終わると、長崎唐通事は存続する立場を失い、終焉を迎えた。ところが、新政府の発足にあたって、旧幕臣などから明治政府に登用された者も少なくなく、開港場長崎の運営に関わる特殊な職業的知識・技能をもつ人材も多数採用されたのである。その時期に何礼之は、6月に開成所御用係を拝命し、7月に小松帯刀に「随行上京」を命じられて大坂に転出し、9月に一等訳官に任じられた。明治2（1869）年3月15日に造幣局判事兼任に命じられ、12月3日に大坂洋学校督務の任命を受け、翌3（1870）年に大学少博士に任じ、自ら教鞭を執るかたわら経済・法律類の洋書を翻訳することになった。明治4年に新政府による岩倉使節団の「欧米派遣特命全権大使一等書記官」として随行し、外務省六等出仕になった。明治5（1872）年、使節団のアメリカ滞在中には、何礼之が翻訳の実務を担当し、またワシントン滞留中は副使木戸孝允に付随して政治調査を行った。8月に大使の先発としてイギリスに渡航し、明治6（1873）年6月までは欧州を巡行していた。帰国してから、明治7（1874）年2月に内務省五等出仕翻訳事務局御用掛となり、6月に各国条約改定取調掛、さらに台湾蕃地事務局御用掛に転じた。4ヶ月後、内務省所属となり、明治9（1876）年2月に内務権大丞、翌10（1877）年1月に内務権大書記官・図書局長を歴任し、明治13（1880）年5月に大書記官に進んだ。明治17（1884）年12月に元老院議員になり、明治23（1890）年10月元老院が廃止されるまで在職していた。明治24（1891）年12月に貴族院勅撰議員となった。その後、晩年の何礼之は次第に政界の表舞台から離れ、履歴には区・町レベルの議員当選しか記録されなかった。<sup>18)</sup>

上述のとおり、長崎の唐通事の家系に生れた何礼之にとって、英語の習得が彼の出世の糸口というべきであろう。英語を習得することにより、彼は地役人系統の唐通事から幕臣に抜擢され、明治維新後にすぐに新政府に起用され、さらに外交界、中央官界に出て活躍するようになったのである。

### 三、何礼之の英語習得について

そこで、何礼之に人生の転機をもたらした英語習得の環境と経過を明らかにしたい。

17) 何礼之の「履歴書」（『松方正義関係文書』第十二巻、366 - 373頁）と「履歴」（マイクロ資料「何礼之文書」1）による。詳細は附表を参照されたい。

18) 何礼之の「履歴書」（『松方正義関係文書』第十二巻、366 - 373頁）、「履歴」（マイクロ資料「何礼之文書」1）と「何礼之履歴」（『勅奏任官履歴原書』下巻、219-224頁）による。附表をご参照。

## 1. 何礼之の環境

何礼之は唐通事という家業を継ぐために、幼い頃から唐通事界の先輩、大通事「鄭敏斎、呉泰蔵に従い唐話を学」んでいた。<sup>19)</sup> 五歳にして稽古通事になった時から安政改元（1854）まで、十年も唐話を修習していた。何礼之が明治2（1869）年に刊行した訳書『政治略原』に流暢な漢文で「自序」を書けたのも、少年時代に正統な訓練を受け、漢語の修習に励んだためと考える。

しかし、異国船の来航に伴い、日本の外部環境と対外貿易などが変わりつつあった。その情勢の変動に応じて、早くも19世紀初頭から唐通事の語学修業において漢語以外に満洲語も習得するようにと求められたのである。文化5（1808）年8月に英艦フェートン号が長崎へ来航してから二ヶ月後、

満州並ニ魯西亞、諺厄利亞文字言語心得ノ者無之ニ付、満州ノ方ハ唐通事、魯西亞ノ方ハ阿蘭陀通詞共、可致修業旨。<sup>20)</sup>

との命令が江戸より11月1日に長崎に届いた。11月29日に、唐大通事神代太十郎、小通事瀬川仁十郎、東海安兵衛、彭城仁左衛門、小通事並彭城太次兵衛、小通事末席平井考三郎、楊又四郎、稽古通事呉定次郎の八名は満洲語の修業を命じられた。<sup>21)</sup>

満洲語学習の方は早く其緒に就いたが、一方、蘭通詞の英語修業の方は、教師の人選問題で遅れていたが、漸く文化6（1809）年秋に Jan Cock Blomhoff を教師に選定し、翌7（1810）年3月になって、さらに英語の修習に従事していた16名の通詞の中から岩瀬弥十郎、西吉右衛門、吉雄六次郎、猪股伝次右衛門、馬場佐十郎の5名を抜擢し、専ら英語教育を受けさせた。

19世紀中葉に至って、異国との交渉が複雑化するにつれて、従来長崎で日清貿易・交渉の現場で通訳を担当していた唐通事が新たな外交折衝にあたるようになり、その例としては、弘化2（1845）年7月、英艦サマラン（Samarang）号が長崎に入津した当初フランス語およびオランダ語で作成された文書が通じなかった。しかし、幸いにサマラン号に広東香山県出身の船員金朱勝がいて、唐大通事瀬川四郎八、小通事游龍彦十郎などが遣わされ、船の基本情報を聞くことができた。<sup>22)</sup> 翌弘化3（1846）年6月、フランス軍艦クレオパトラ号が長崎に来航した

19) 『明治維新以後の長崎』『何礼之』の条、長崎市小学校職員会、1925年、312-313頁。

20) 『続長崎実録大成』巻十一「年表挙要二」、長崎文献社、1974年、434頁。

21) 同前注。

22) 古賀十二郎「英艦サマラン号の渡来」、『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、44-46頁。弘化二年七月二十日「長崎へ英国船（サマラン号）渡来ノ報」、および弘化二年八月廿四日「在福州英国船琉球諸属島ノ測量ヲ乞フニ付咨文提出ノ報」、東京大学史料編纂所の所蔵島津家本『琉球外国関係文書』（ハイパーテキスト版 <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/yokoyama/okinawa/frame.htm>）。



際に、平野繁十郎、鄭幹助ら唐通事が船中の清国人の通訳によりようやく意が通じ、訊ねることができた。<sup>23)</sup> 同じ時期、江戸の方では、昌平坂学問所で「唐話稽古」のために江戸に呼び寄せられた唐通事に、弘化4（1847）年に「夏秋之内浦賀表江相詰候様」と命じられたのである。<sup>24)</sup> 嘉永2（1849）年、唐小通事助周恒十郎が何隣三に引続いて学問所に勤め、其の間も江戸と浦賀を往来した。彼が浦賀に出役した記録は下記の通りである、

a 嘉永二年十月

六日 捨藏

（中略）一、唐通事周恒十郎浦賀ヨリ罷帰候二付、唐話指導為致候様惣教衆ヨリ申来候二付、返事遣シ出役江申達候。<sup>25)</sup>

b 嘉永三年三月

廿七日 都賀太郎

（中略）唐小通事助周恒十郎主膳殿被仰渡之通、夏秋之内浦賀表江相詰候二付、浦賀奉行江引渡二相成候由、惣教ヨリ達至ル。<sup>26)</sup>

c 嘉永四年三月

廿七日 都賀太郎

（中略）一、唐小通事周恒十郎浦賀表江相詰候趣、八洲ヨリ達来。<sup>27)</sup>

当時しばしば浦賀に来航した異国船に乗船していた通訳に中国人がおり、漢文で作成された文書もあったため、幕府はそれに対応できるように、江戸勤務中の唐通事を来航した異国船との交渉で通訳に当たらせようとしていたのである。それで、「唐人」以外の異国人との接触には、唐通事にはこれ以後の外交事情の複雑化、交渉相手の変化を予測し、英語など外国語研修の必要性が喚起されたのであろう。

## 2. 英語習得の経緯

それでは、何礼之が英語を習得した経緯の詳細について、前掲古賀、大久保両氏の研究成果を踏まえ、何礼之の「履歴」を基礎に、何礼之と共に英語を修習した平井希昌が残した「履歴

23) 弘化三年六月六日「長崎へ仏国船渡来ノ報」による。『琉球外国関係文書』（ハイパーテキスト版）。

24) 『日本教育史資料』七、巻十九、「唐話稽古之事」、496丁。当時昌平坂学問所に在勤したのは小通事助何隣三である。

25) 『昌平坂学問所日記』〔Ⅲ〕「己酉日暦」、斯文会、2006年、60頁。

26) 『昌平坂学問所日記』〔Ⅲ〕「庚戌日暦」、76頁。

27) 『昌平坂学問所日記』〔Ⅲ〕「辛亥日暦」、106頁。

書」などの関係史料を合わせ、検討したい。

上述したとおり、19世紀初期に幕府から英語の修習を命じられたのはオランダ通詞の方であったが、安政元（1854）年の「日米和親条約」の締結により、長崎も神奈川と同時に開放され、唐通事は漢語、満洲語だけでは業務処理が甚だ困難となり、英語の修習が必要となった。若き何礼之も唐通事でありながら、英語を習得しようと志した。その始まりは「履歴」安政元年の条に記されている。

頻年魯佛英米等軍艦絡繹トシテ来航、慨然外国語兼修ノ志ヲ起ス。時ニ和蘭通詞中ニ英語ニ通スル者アレトモ、從來唐蘭両通事ハ互ニ門戸ヲ分テ相譲ラズ、因テ之ニ師事スルヲ屑シトセズ、独学成業ヲ企、百方苦辛ノ末、英華・華英字典ヲ在港唐人ヨリ求メ得テ、略発音文法ヲ習得シ。<sup>28)</sup>

この履歴から何礼之の英語修習早期における、（1）修習の困難：英語に堪能であるオランダ通事に教わることを回避、（2）修習の手段：長崎に来航する唐人から英華・華英字典を購入し、それを教材にして独学、（3）修習の結果：発音・文法の基礎をほぼ身につけた、という三つの状況が把握できる。ここで何礼之撰「平井希昌墓碑銘」に同じ経緯を述べる部分を合わせてみると、さらに詳しい事情が分かる。

（前略）時ニ幕府訳家英俊ノ子弟ニ命ジ、英語ヲ兼修セシム。君何礼之助ト俱ニ選バレ、佗業師ニツイテ教ヘ受ケルコトヲイサギヨシトセズ、専ラ五車韻府等漢ノ英書ニヨリ、講究攻習ス、其ノ間ノ艱苦名状スベカラズ。…<sup>29)</sup>

とあるように、何礼之の英語修習は、全くの個人的な行為ではなく、長崎奉行より許可があったわけであるが、唐通事平井希昌（義十郎）も同時にその資格を得ていたのである。教材については、履歴にある「英華・華英字典」だけで特定できない中・英文辞書とは、碑銘に記された「五車韻府」という題名によって、ロバート・モリソン（Robert Morrison、馬禮遜、1782-1834）が編纂した「華英・英華字典」だと推定できる。

「華英・英華字典」（「A Dictionary of the Chinese Language」）は中国に渡来した最初のプロテスタント宣教師ロバート・モリソンにより編成され、1815年から1826年にかけて3部6巻に分けて出版された字典である。平井の碑銘にあげられた『五車韻府』は、1819-1820年に出版されその第二部であり、「華英・英華字典」の各部の中でかなりの知名度があり、もっとも歓迎され

28) 何礼之「履歴」。附表にご参照。

29) 平井洋『維新への滯標－通詞平井希昌の生涯－』、新人物往来社、1997年、12頁。文中「佗業師」の「佗」は恐らく「陀」の字であり、阿蘭陀通詞のことを指している。

た一部だとされている。<sup>30)</sup>。これまでの研究で明らかにされたように「華英・英華字典」は出版後まもなく長崎に輸入され、1828年にすでに日本語訳が行われ、1830年に江戸幕府も正式に購入し、天文台の訳員に参考書として与えられた。<sup>31)</sup> 長崎の唐通事家で育った何礼之も前からその字典を知っていたはずである。

履歴と碑銘とでは、いずれも何礼之が英学先駆者として経験した苦勞を述べている。しかしながら、長年唐話教育を受けていた何礼之らにとって、華英・英華字典を入門教材とし、中国語を媒介にして修習するのは実に有効的であった。その代表とした『五車韻府』の場合は、本来中国語学習者のために編纂された字典であって、中国文化・漢字の要素が至るところに見られるのは勿論、収録されている見出し字に英語で漢字の構造・意味を説明し、さらに漢字で用例をあげて英語の翻訳を付け加える形になっている。それは中国語に長ずる唐通事にとって助けとなることが大であったろう。また、中国語の発音を熟練している何礼之らにとって、漢字の読み方を表示するローマ字の綴りを通して、逆に基本的な英語の発音ルールを身につける方法も可能であった。そのため何礼之が中国語を媒介に「略発音文法ヲ習得」できたのである。<sup>32)</sup> 外国人に教わることが極めて困難であった当時では、他の日本人が初めて英語学習を行った段階より、何礼之の勉強法ははるかに有利であったことは明らかである。

一方、何礼之は唐通事としての誇りをもってオランダ通事に師事することをいさぎよしとしなかったため、来崎唐人から「華英・英華字典」を求め得て自力で模索しながら勉強するしかなかった。当時のオランダ通詞界において英語学習の歴史は三十年以上もあり、経験の蓄積もあったが、しかし、それはあくまでもオランダ語を語学の基盤とする通詞に適する経験と学習法であり、唐通事には最適だとは限らない。この意味では、何礼之らは「華英・英華字典」を通して英語を自から修習していったことこそ、唐通事にふさわしい英語自習による習得法が見つかったというべきであろう。

ところが、何礼之が「華英・英華字典」で英語の基礎をある程度学んだが、発音・会話に至ってはきわめて困難であったと思われる。特に何礼之ら常に対外交渉の現場にいる通事としては、通訳の能力が不可欠だとされている。書物だけで英語を修習してきた何礼之は、正しい発

30) 朱鳳『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』、白帝社、2009年、204-205、208頁。

31) 古賀十二郎「Dr. Robert Morrison の華英英華辞典」、『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、42-44頁。朱鳳前掲書、195-216頁。

32) 『五車韻府』は19世紀末から20世紀初めの中国人・日本人の英語学習書になったとされているが（朱鳳前掲書、108頁）、何礼之らの英語修習に『五車韻府』が登場したことによって、その歴史を19世紀中葉に遡ることができる。

音や簡単な会話を教えてくれる人物の出現を一番に望んだに違いない。幸いに、ようやく英語の出来る人から直伝される機会が訪れた。ここで平井希昌の履歴書が残した一例を取りあげたい。

安政五年戊午歳十二月

稽古通詞<sup>ママ</sup> 平井義十郎外

右ノ者共儀、英船乗組ノ中国人共英語心得居候趣二付、新地前英人止宿所罷越英語修学可致候。右ノ通り被仰渡候間申渡候。

午十二月<sup>33)</sup>

安政5年12月、平井らが英語を教えてもらいに長崎新地前英人止宿所へ赴くようにと命じられたのである。そのことについて、『長崎県人物伝』の「平井希昌」条に、

游龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎、平井義十郎、何礼之助の五人に命じて英船乗組支那人（新地前英人止宿所に滞在せり）に就き英語を学ばしむ。<sup>34)</sup>

と記されており、ここから英語を学んだのは平井ら五人であり、その中に何礼之が入っていたことがわかる。そのほかの三人もすべて唐通事の同僚であるが、游龍彦三郎（1829-1865）は劉一水系彭城氏の分家である游龍氏の十代目であり、当時29歳、すでに小通事助であった。彭城大次郎（1832-1874）は劉鳳岐を祖とする彭城氏の第十一代であり、安政5年11月8日に小通事助に昇進したばかりであった。太田源三郎（1835-1895）は唐通事太田氏本家の六代目であり、嘉永7年閏7月5日に小通事末席に任ぜられた者である。<sup>35)</sup> このように唐通事の5人が英語を学んだのである。

英人止宿所へ赴くといえども、イギリス人から直接に教えてもらっただけではなく、英語のわかる中国人船員に教わるのである。長崎奉行がこうした指示を下したのも、ただのイギリス船が寄港しただけではなく、ちょうど唐通事と言葉が通じ、英語もできる中国人船員がいることを考慮したわけである。中国語を生かして中国人船員に英語を学ぶのは言葉上に頗る便利で、効率も高かったと考えられる。

しかし、記録には「安政五年十二月」という情報しか残されていないため、唐通事五人を教

33) 平井洋『維新への濤標－通詞平井希昌の生涯－』、15頁。

34) 『大札記念 長崎県人物伝』、長崎県教育会、1919年、854-855頁。

35) 額川君平編『訳司統譜』、宮田安『唐通事家系論考』による。三人の中に、彭城大次郎は、明治になって中平と改名し、新政府に登用されたが、明治7（1874）年日本の台湾出兵にあたって台湾に赴き、9月27日に当地で死亡した。太田源三郎も維新後に資政と名を改め、外務省・工部省で活躍したと伝えられている。

えた中国人船員が、何時、どの船で長崎にやってきたかは明らではない。『平戸史料年表』等によって、安政5年12月1日（1859年1月4日）から一ヶ月以内に長崎に来航したイギリス商船は5隻あったが、外に12月7日まで停泊していたイギリス商船1隻を加算すると、可能性がある船は合計6隻であった。それぞれは「入津」から「退帆」までの日数が異なるため、下記の表に整理してみた。<sup>36)</sup>

船名	入港日	退帆日	長崎滞船日数	出典*
英国商船①	安政五年十一月二十日 (1858.12.24)	同十二月七日 (1859.1.10)	28日	(101頁)
英国商船②	同十二月二日 (1859.1.5)	同十二月二十四日 (1859.1.28)	23日	(109頁)
英国商船③	同十二月五日 (1859.1.8)	同十二月二十四日 (1859.1.28)	20日	(109頁)
英国商船④	同十二月十日 (1859.1.13)	翌六年二月二十四日 (1859.3.28)	75日	(113頁)
英国商船⑤	同十二月十六日 (1859.1.19)	不明	不明	(116頁)
英国商船⑥	同十二月二十四日 (1859.1.27)	翌六年正月三日 (1859.2.5)	10日	(120頁)

(\*『維新史料綱要』巻三による)

この6艘の中に、英国商船④が2ヶ月半停泊していたが、他は殆んど一時長崎に寄港したイギリス船であるため、何礼之ら5人の唐通事が英人止宿所で中国人から英語を教わったとはいえ、その学習は長く続くことはなかったと思われる。

これまでの研究で言及されていないが、安政5年12月に何礼之ら5人の英語学習は、唐通事の中国語会話による習得を意味している。何礼之の英語修習の全過程からみれば、『五車韻府』など書物と漢字、中国語の知識を通じて基礎を習得した最初の第一歩に引き続き、英語のできる中国人から直接に学ぶという重要な第二歩が確立された。史料が闕如してこの一例しかあげられないが、幕末日本の英語学習において、オランダ通詞の一派のほかに、中国語を通じて行われた英語習得の事実を再確認すべきといえる。

やがて翌安政6（1859）年正月2日、唐通事たちにさらに新機会が訪れた。当時の大通事鄭幹輔が游龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎、何礼之助、平井義十郎を引率し、長崎滞在中のアメリカ船に赴き、米人マゴオン（D.J.Macgowan、瑪高温）にアルファベット・発音から始ま

36)『維新史料綱要』巻三、維新史料編纂事務局、1966年、108-126頁。

って二週間ほどの間であったが、英語を教わったのである。アメリカ船に赴いた唐通事は、リーダーの大通事鄭幹輔の他、英人止宿所の中国人船員に英語を学ぶようにと命じられた5人であった。<sup>37)</sup>

その時期から、何礼之の英語能力は一段と向上した。米人マゴオンに従って勉強した後、相前後して「ウキルリヤムス<sup>38)</sup>、リツギンス<sup>39)</sup>、ウオルス<sup>40)</sup>、ウエルベツギ<sup>41)</sup>」といった何人もの外国人から本式の英語を学び、次第に通訳・読書が上達し、終に両方とも自由にできる英語の達人となった。これは記録上に何礼之の英語が成業するまで最終の段階であるが、その前に中国語で英語習得の基礎を築き上げたからこそ順調に進むことができたと思われる。しかしながら、この段階の英語研修でアメリカ人やイギリス人に教わることになったからといって、中国語と絶縁したわけではない。マゴオンをはじめ、ウキルリヤムス、リツギンス、ウエルベツギ、長崎に渡来する前に4人とも清国に滞在していたわけであり、特にウキルリヤムスとリツギンスの場合は日本語ができないが、中国語をすでに習得していたと考えられるからである。何礼之が彼らに英語を修習する間に、中国語でコミュニケーションを行った可能性も十分に考えられる。

以上の考察から、何礼之が英語学習をいつ開始したかについては、古賀氏の考証によって安政六（1859）年正月2日が唐通事の英語学習の嚆矢だとされる通説が認められてきた。しかし、

37) 「正月二十三日長崎奉行達書 支配向へ 英語稽古の件」、東京大学日本史料編纂所『大日本古文書 幕末外国関係文書』之二十二、1939年、104-105頁。鄭幹輔以外にアメリカ船に赴いた唐通事は5人、6人の二説がある。6人だとすれば、後1人が姓名不詳となる。注1 掲古賀論文。

38) チャニング・ムーア・ウィリアムズ（Channing Moore Williams、維廉、1827-1910）、米国聖公会の伝教師、立教大学の創始者である。中国への伝教の任を帯びて1856年上海に到着し、1859年来日し、ジョン・リギンズとともに長崎崇福寺の境内に滞在していた。古賀十二郎「Channing Moore Williams」（『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、九州書房、1947年、82-84頁）に「其頃（文久二年）、邦人に英語を教えていたらしい」とあるが、其の前の英語教育の詳細については一切触れなかった。

39) ジョン・リギンズ（John Liggins 1829-1912）、英国生れで、米国聖公会から派遣されたプロテスタントの宣教師である。1856年から中国に赴き、上海を中心とする地域で伝教を行っていたが、療養のために1859年に長崎に渡来した。長崎奉行の要求により、滞在中に六ヶ月にわたって8名の通訳官に英語を教授することになった。1860年に離日。中村敏『日本キリスト教宣教史』、いのちのことば社、2009年。古賀十二郎「John Liggins」、『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、79-81頁。

40) 注1 掲古賀論文により、「ウオルス」というのは当時出島在留の米人「ワルシ」（R.J. Walsh）と推定される。マゴオンが長崎を去った後、出島の居宅、また興善町の唐通事会所で英語を教えていた人物である。

41) グイド・フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck、1830-1898）、米国オランダ改革派教会から布教のため上海から長崎に派遣されたが、明治維新まで英語などを教え生計を立てており、長崎英語伝習所の英語教師に採用された。古賀十二郎「Guido Herman Fridolin Verbeck」、『徳川時代に於ける長崎の英語研究』、84-90頁。大橋昭夫、平野日出雄『明治維新とあるお雇い外国人：フルベッキの生涯』、新人物往来社、1988年。



上記の履歴、碑銘などを総合して考えれば、「安政六年」よりさらに遡ることができることは明らかであろう。

何礼之の「履歴」では英語学習の開始が「安政元年」の下に記されているが、実は検討を要するであろう。「履歴」に安政2年の記事もなく、「安政三年」の条に「十七歳ニ至リ、米人マゴオン、ウキルリヤムス、リツギンス、ウオルス、ウエルベツギ諸氏ニ真炙シテ、通訳読書自由ナルコトヲ得」とある。疑問は、「米人マゴオン」の長崎来航が履歴記録の1856年ではなく、1859年のはずである。マゴオンが離日した以後、さっそく出島滞在のウオルスから教えてもらうことになったが、それも明らかに1859年のことであった。残りの3人も同じく1859年に来崎したが、リツギンスは5月に清国から渡来、ウキルリヤムスは2ヶ月遅れて長崎に上陸、ウエルベツギは11月に上海から来た。これらのことから、何礼之が上記の5人に英語を教わったのは1859年以降と推定できる。「履歴」の「安政三年」という記録は確実ではない。安政元年すなわち1854年の神奈川条約で長崎を開放したことを契機に何礼之が英学に進んだ可能性は十分に考えられるが、さらに確実性のある証拠が未だ見つからない。ただ、安政5（1858）年以前にはすでに何礼之の英語修習が始まっていたことは確実である。

何礼之は数名の外国人から英語を学んでから四年後、彼が訳家学校洋学世話掛になり、さらに文久3（1863）年、英語稽古所学頭となった。そこから何礼之が公立・准公立の機構で英語学習を指導する立場になり、他に自邸にも私塾を設け英語教育をはじめていたのである。

#### 四、おわりに

何礼之の履歴を整理し、彼が英語を習得するまでの経緯を考察してきた。何礼之の生涯の経歴を通じて、英語の習得は唐通事であった彼の人生にどれほど大きな転機をもたらしたかが見えてくる。

何礼之の英語学習は、異国船の来航による幕末日本の外部環境の変化を背景に、唐通事が英語兼修の必要性を認識してから発生したものである。彼の英語修習は中国語を以て始まり、華英・英華字典を用いて独学し、長崎に滞留したイギリス船の中国人船員、さらにアメリカ人マゴオンなどに教わることに至るまで、幾つかの段階があった。この経緯でもっとも注意すべきことは、彼にはもとより中国語という語学の特技があり、それを生かして学習上の困難を克服し、当時他の日本人が初めて英語を習得するよりはるかに有利であったことである。そこで、何礼之を代表とする幕末における唐通事の英語習得が、従来の研究で知られるオランダ通詞の一派と違って中国語を媒介に行われたことは、日本英学史上において再認識する必要がある。

また何礼之の英語習得に関する資料を統合してみれば、19世紀50年代以降、唐通事の中に中

国語から英語の研修に転じたグループが存在していたことは確かである。10代からともに英語学習に励んでいた一歳年上の仲間平井希昌（義十郎）は、文久3（1863）年7月に「長崎奉行支配定役格」いわば御家人身分の専属通訳に抜擢され、英語稽古所の学頭に任命されたことから、元治元（1864）年6月の「運上所詰」、さらに慶応3（1867）年の済美館での英語教授まで昇進した、すべて何礼之と同じ道程であった。二人の他に、安政5（1858）年に英人止宿所へ、6（1859）年にアメリカ船に赴くのは游龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎がいた。また「何礼之事歴」に名前を残した廬高朗と柳谷謙太郎の二人も、何礼之の手解きで英語を学習したことがある。後に柳谷は慶応3年に何礼之とともに外国方として江戸「出府」を命ぜられ、明治以後アメリカに留学を果たし、米国桑港（サンフランシスコ）領事・外務省書記官などを経歴した。

以上のように、幕末明治期における長崎唐通事の変容において、何礼之の英語習得は先駆的・典型的意味をもっていたと評価することができるであろう。

## 附表

## 何礼之履歴

1840年 (天保11)	天保十一年七月十三日長崎西上町ニ生ル。	松方、何
1844年 (天保15)	天保十五年辰年十二月六日父跡相統唐稽古通事被仰付、受用銀一貫八百七拾目被下置候。 小通事末席何栄三郎倅 何礼之助	訳司
1854年 (嘉永7 / 安政1)	嘉永七年安政ト改元迄漢語学修業 十五歳 頻年魯佛英米等軍艦絡繹トシテ来航、慨然外国語兼修ノ志ヲ起ス。 時ニ和蘭通詞中ニ英語ニ通スル者アレトモ、従来唐蘭両通事ハ互ニ門戸ヲ分テ相譲ラズ、因テ之ニ師事スルヲ屑シトセズ、独学成業ヲ企、百方苦辛ノ末英華華英字典ヲ在港唐人ヨリ求メ得テ、略発音文法ヲ習得シ。	松方、何
1856年 (安政3)	安政三年、十七歳ニ至リ、米人マゴオン、ウキルリヤムス、リツギンス、ウォルス、ウエルベツギ諸氏ニ真炙シテ、通訳讀書自由ナルコトヲ得。	松方、何
1857年 (安政4)	安政四巳年十二月五日小通事末席被仰付候。 稽古通事ヨリ 何礼之助	訳司
1859年 (安政6)	安政六年、開港通商ノ挙アリ、税関従事ヲ命ゼラル。	松方、何
1860年 (安政7 / 万延1)	安政七申年九月十五日、小通事助過人被仰付候。	訳司
1861年 (文久1)	文久元年七月廿三日、受用銀一貫百三十目御増都合銀三貫目ニ被仰付候。同年十一月廿四日、小通事助被仰付候。 小通事末席ヨリ 何礼之助	訳司
1862年 (文久2)	昨年ヨリ魯人對馬島ノ一角ヲ占領シ、国旗ヲ掲、兵營ヲ建テ以テ為ス所アラントス。幕府撤退ヲ要求スレトモ、敢テ聴カズ、七月長崎鎮尹ノ命アリ、組頭中臺某ニ随行シテ、折衝数回要領ヲ得ス、終ニ英ノ砲艦魯公使ノ書ヲ齎ラシ来リ解決セリ。	松方、何
	十月復命。	何
1863年 (文久3)	文久三年七月、長崎奉行支配定役ニ挙クラレ、英語稽古所學頭ニ補シ、鎮尹府内ニ校舎ヲ開キ、幕士及地役人ノ子弟及諸藩ノ学生ヲ教授シ、尚外交及税関ノ事ヲ取扱フ。	松方、何
	但長崎ハ數百年來外国ノ互市場ナレバ、土地ノ人士ハ概ネ通訳ノミヲ専攻シ、向上ノ學業ヲ修ムル者少シ、因テ此弊ヲ革メンコトヲ建議シ採用スル所トナリテ茲ニ至レリ。	何
1864年 (元治1)	文久四年学生漸ク増シ、校舎狹隘ヲ告ク、依テ校舎ヲ江戸町活版所跡ニ移シ、尚自邸ニ私塾ヲ開キ、以テ後進ヲ教養ス。塾生中、巻退蔵(男爵前島密)、林謙三(男爵安保清康)、中村某(青江秀)、爪生雷吉(爪生震)、其他數十名アリ。	松方、何
	七月各国軍艦下関砲撃ノ為メ、進發ニ付之ヲ拒止スベク幕府ノ命アリ、昼夜兼行、豊後姫島ノ根拠地ニ向フ。至レバ既ニ出帆ノ後ニテ及バズ、艦中志道聞多伊藤俊介ノ二名アリ、和服ニ改装シ、日本ノ小艇ニテ長州領内ニ上陸セリト、島吏ヨリ報告アリ。	

1865年 (元治2)	元治二年、服部鎮尹ノ後援ヲ得、自ラ邸内ノ空地ニ塾舎ヲ新築シ、専心修学ノ便ヲ謀ル。 入塾生踵ヲ接シテ至リ。 塾生中ニハ左ノ諸氏ヲ重ナル者トス。 薩摩 前田弘安(前田正名) 原田莊助 白峰駿馬(実ハ越後長岡) 錦戸広樹(陸奥宗光) 谷村小吉 岸良俊之丞 川崎強八 高橋四郎左衛門(高橋新吉) 鮫島武之助 外数十名 加賀 高峰讓吉 芝水昌之進 外二十余名 土佐 野村維章 萩原三圭 外十余名 肥前 山口範三(山口尚芳) 弁田豊 野田益晴 外数名 阿波 高橋顕正(芳川顕正) 山田要吉 高良二 外十余名 筑前 井上良一 本間英一郎 栗野慎一郎 其他 其他熊本久留米、柳川松前等ノ諸藩及地役人子弟併セテ塾生百数十名塾外生二百名ヲ算ス。	松方、何
	鎮尹ノ命ニ依リ、英国海兵陸戦隊操典ヲ訳成シ、	松方、何
	薩藩ノ需ニ応シテ之ヲ贈ル。	松方
	長州藩邸ノ跡ニ学校ヲ建テ、済美館ト号シ、英学ノ外始メテ佛語独逸語ノ専門教師ヲ聘ス。	松方、何
1867年 (慶応3)	慶応三年、幕府ノ命ニ依リ入洛、柴田大介、柳谷謙太郎、松田周次外四名ヲ随フ。 七月、開成所教授職並。	松方、何
	十一月軍艦役主格 海軍伝習生徒取締。 江戸勤役中開塾、星亨、土取忠良、中村六三郎其他十数名入塾ス。	
1868年 (慶応4 / 明治1)	慶応四年、王政復古ノ戦アリ、英国海軍教師全政府ノ中立ニ依リ、退去ニ付、軍艦奉行勝安房専ラ公使ノ間ニ交渉ス。又教師ヨリ大樹ニ謁見シ、建議スル所アリ、始終通訳ニ任ス。	松方、何
	明治元年六月、東京鎮将府ニ於テ開成所御用掛被命。	松方、何
	柳川春三、神田孝平、箕作麟祥、田中芳男全断。	松方
	七月小松帯刀氏ニ随行上京被命。 政府ヨリ英国東洋銀行ニ横浜税関ヲ抵当トシテ洋銀三万元借用ノ交渉アリ、其契約書作成及通訳ヲ為ス。	松方、何
	九月六日、一等訳官ニ任ス。	勅奏、松方、何
	十一月、大阪中ノ島高松藩邸内ニ移住、開塾、入塾生左ノ諸氏アリ 高松 松田周次 高原弘道 外数名 尾洲 加藤謹一郎 小川金冉吉 外数名 和歌山 林和太郎 戸波親信 外数名 豊岡 浜尾新 吉村寅太郎 外数名 土佐 芳野春弥(豊川良平) 外数名 大野 宮崎道正 外数名 薩洲 奥山政敬 鮫島武之助 外数名 大阪 長谷川芳之助 外数十名 其他姫路、狭山、高槻、龍野等ヨリ数十名アリ	松方、何
	大阪ヨリ長谷川芳之助、松尾周造等、	松方
	及若狭小浜ヨリ星亨来リ、澤井鷲平、澤井熊太郎等ト助教ヲ勤ム。	松方、何

1869年 (明治2)	明治二年一月六日、伊藤博文ハ中島信行ヲ従ヘ神戸ヨリ、陸奥宗光ハ余ヲ携ヘテ大阪ヨリ、牧方ノ旅舎ニ相会シ、将来施政ノ方針、廃藩、其他ノ建議書起草、入洛。途上ニテ横井参議ノ凶変アリ。翌七日参内建言スル所アリ、又此序ニ余ハ関西大学設置ノ議ヲ徳大寺、河野両郷ニ謁シテ建議書ヲ提出ス。	松方、何
	三月十五日、造幣局権判事兼任。	松方、何、 勅奏
	是ヨリ先大学ハ東京ニ設置ノコトニ決シ、神田、箕作ト俱ニ東上ノ内旨アリタレ共、猶京阪ノ地ニ大学建設ノ宿志ヲ遂ケント欲シ、私塾ヲ開キ、以テ機ノ熟スルヲ待タンコトヲ内請ス。適大隈参議大阪造幣司ヲ改革シ、英国技師ウートルスヲ聘シテ、新ニ造幣局建築ニ着手ス。故ニ此命アリ。 十一月十日、辨官支配家禄四十五俵下賜。	松方、何、 勅奏
	十二月三日 大阪洋学校督務 民部省	松方、何
	是ヨリ先関西大学開設ノコトニ議スルヤ、専心民部省ニ請願シ、或ハ大阪府ニ建議シ、眠餐ヲ忘レテ運動シタル結果、漸ク府立ト為シ、此命ヲ拝ス。	
	十等官禄下賜	勅奏
1870年 (明治3)	明治三年三月七日、任大学少博士。大阪洋学校校務取扱。	勅奏、松方、何
	四月十二日、叙正七位	勅奏
	大阪洋学校、大学ノ分校ト為ル。多年ノ宿志茲ニ達ス。此間経済便蒙、西洋法制等ヲ翻訳出版ス 岩倉輔相公養病ノ為メ、紀州藩邸ニ滞留中其間数次招カレテ英国憲法沿革史ヲ講演ス。	松方、何
1871年 (明治4)	明治四年七月十八日、大学ヲ廃シ文部省ヲ置、追テ御沙汰候迄是迄ノ通り事務取扱可致事。	勅奏、松方、何
	七月廿七日、少教授。 中島永元婦京中事務取扱可致事 文部省	勅奏
	九月晦日、御用有之至急東京ヘ可罷出事 太政官	勅奏
	十月八日、欧米派遣特命全權大使一等書記官。 大使岩倉公、副使木戸、大久保、伊藤、山口四君。	松方、何
	十一月四日、免本官、外務省六等出仕。	
1872年 (明治5)	明治五年、大使ニ從テ米國ニ在リ。	松方、何
	二月六日、一行国務省ニ到リ、尚書フキシユ氏、公使テロン氏、国務省員ト会見、条約改訂、馬関償金免除ノ談判ヲ開ク。続テ数十回ヲ重ネ、殆ント成ルニ及ンテ、英西公使ノ中言アリテ、遂ニ成ラス。 此談判中、塩山三郎重ニ通訳ニ任シ、礼之英和両文ヲ対照翻訳シ、田辺太一、福池源一郎、潤色加刪ニ任シ、時ニハ俱ニ夜ヲ徹セシコトアリ。 又華盛頓滞留中ハ木戸侯ニ附随シテ、汎ク政治ノ事ヲ取調べ、哲学博士クイレル氏ニ会見数回、其勸告ニ依リモンテスキューノ法律精読ヲ解釈ス。後ニ万法精理ト題シテ、翻訳出版セルモノ是ナリ。	
	十月十七日、兼任外務二等書記官。	
	八月、大使ノ先発トシテ英国倫敦ニ渡航ス。	松方、何
	九月ヨリ十月迄英国蘇格蘭ノ都市ヲ巡視シ、宴会席上ノ乾盃演説ヲ為ス。	

1873年 (明治6)	明治六年二月十五日、叙従六位。 欧州巡行中。	松方、何
	六月、大使ニ先ンシ、木戸副使ニ随ヒ帰朝。	
	七月廿四日、帰朝。	勅奏
	十月五日、特命全権大使事務取調御用之節同局へ出仕。	勅奏
	十一月廿八日、補駅逋寮五等出仕 <sup>42)</sup> 。	勅奏
1874年 (明治7)	明治七年二月廿八日、補内務省五等出仕。 記録課翻訳事務可相心得事。	勅奏、松方、何
	四月二日、横浜出張。	勅奏
	六月九日、各国条約改定為取調外務省出頭。	勅奏、松方、何
	六月十七日、台湾蕃地事務局御用掛。	
	十月十日、会社条例取調。内務省	
	十一月十五日、第三局第三課事務。	
1875年 (明治8)	明治八年五月三十日、第三局長。 図書館	勅奏、松方、何
1876年 (明治9)	明治九年一月七日、翻訳課長。	勅奏、松方、何
	二月廿三日、任内務権大丞。	
	三月廿二日、叙正六位。	
1877年 (明治10)	明治十年一月十一日、内務権大書記官。 同日、図書館長。	勅奏、松方、何
	九月十八日、木盃下賜。 三番町失火救助	松方
1878年 (明治11)	明治十一年九月五日、内務省取調局事務取扱。	松方、何、勅奏
1880年 (明治13)	明治十三年五月廿五日、任内務大書記官。	松方、何、勅奏
	六月十九日、叙従五位。	
	九月廿四日、木盃下賜。 函館失火救助	松方
1882年 (明治15)	明治十五年六月十七日、叙勲五等。	松方、何、勅奏
	十月廿三日、図書取調トシテ奈良出張。	松方
1883年 (明治16)	明治十六年十月二日、同断京、阪、奈良出張。	松方
1884年 (明治17)	明治十七年九月三十日、内務省内局第二課兼務。	松方、何、勅奏
	十二月四日、任元老院議官。	松方、何、勅奏
	年俸三千円下賜。 同日、内務省御用掛兼勤。	勅奏

42) 「通信寮五等出仕」の日付について、「松方」・「何」両種の「履歴」では「十月五日」とあるが、本稿は「勅奏」に記載される「11月28日」とする。



1885年 (明治18)	明治十八年二月六日、叙従四位。	松方、何、 勅奏
	三月二日、定議官官等。 三等官相当年俸三千円下賜。	勅奏
	四月七日、叙勲四等。	松方、何、 勅奏
1886年 (明治19)	明治十九年一月十九日、内務省御用掛兼勤被免。	勅奏
	三月廿九日、元老院議官官等年俸改正。	
	三月三十日、叙勲任官二等。	
	十一月三十日、叙勲三等、賜旭日中綬章 <sup>43)</sup> 。	
1887年 (明治20)	明治二十年二月廿五日、高等法院予備裁判官。	松方、何、 勅奏
	十二月七日、木盃一組下賜。 長崎市学校寄附	松方
1888年 (明治21)	明治二十一年、東京市参事会員当選。	松方
1889年 (明治22)	明治二十二年六月、東京市名誉職参事会員ニ当ス。 十一月廿五日、明治廿二年八月三日勅令第百三号ノ旨ニ依リ大日 本帝国憲法発布記念章ヲ授与ス	勅奏
1890年 (明治23)	明治二十三年十月二十日、元老院閉止。 同日、錦鶏間祇候。	松方、何、 勅奏
	十月廿一日、在職勉勵ノ賞金八百圓下賜。	松方、何
1891年 (明治24)	明治二十四年十二月廿一日、勅選貴族院議員。	松方、何
1894年 (明治27)	明治二十七年五月廿一日、叙正四位。	
1895年 (明治28)	明治二十八年四月廿五日、褒詞。	松方
1896年 (明治29)	明治二十九年三月廿九日、第七回帝国議會召集勳精ニ付銀盃一組 下賜。	松方、何
1897年 (明治30)	明治三十年六月一日、木盃下賜。 廿七八年卹兵ニ付	松方
1901年 (明治34)	明治三十四年六月十五日、木盃下賜。 須磨警察署署内一ヶ谷 学校寄附	松方
	十一月三十日、東京市赤坂区一級選出区会議員当選。	松方、何
1902年 (明治35)	明治三十五年二月十七日、木盃一組下賜。 青山学校寄附	松方
1905年 (明治38)	明治三十八年七月一日、木盃下賜。 卅七八年戦役卹兵	松方
1906年 (明治39)	明治三十九年三月一日、木盃下賜。 同上軍需品寄附	松方
	四月一日、叙勲式等、瑞宝章。 卅七八年戦役ノ勲ニ依リ	松方、何

43) 該当叙勲・賜章は、「松方」・「何」両種の「履歴」では「十月三十日」とあるが、ここは「勅奏」に記載した日付とする。

1910年 (明治43)	明治四十三年五月三十一日、東京府渋谷町二級町会議員当選。	松方、何
1911年 (明治44)	明治四十四年十月廿三日、木盃下賜。 渋谷町道路橋梁修善費寄附	松方
1912年 (大正 1)	大正元年十二月三十日、明治天皇御遺物画幅並ニ朧銀透彫卷簾入下賜。	松方、何
1916年 (大正 5)	大正五年四月一日、旭日重光章。	松方、何

(松方 = 『松方正義関係文書』第十二卷所収「履歴書」  
何 = 東京大学蔵マイクロ資料「何礼之文書」1 所収「履歴」  
訳司 = 潁川君平編『訳司統譜』  
勅奏 = 『勅奏任官履歴原書』下巻所収「何礼之履歴」)